

水遊びでタライに水を入れておき、そばにカップやペットボトルを置いておいた。①A児はカップに水を入れ、その水をペットボトルの中にそっと注ぎ、いっぱいになると「先生！いっぱいになったよ」と嬉しそうに見せに来た。保育者が「うわーほんとだ。満タンだね。」と言うとA児は「これはコーラだよ」と言う。保育者が「じゃあ飲んじゃおう！ゴクゴク、シュワシュワー」と飲んで見せると、「もう一回作るね」と言ってA児は再び時間をかけて、少しずつ水を汲んでは入れていた。その様子を見ていたB児は「ぼくはオレンジジュースにする！」と言って、②タライの中にペットボトルを沈め、水を入れようとした。ペットボトルの口から泡が出てくる。③保育者「あれ？ぷくぷくって言うてるよ」と泡を指差して言うと、B児「うん。ぷくぷくぷく…」と言って入れていた。A児もタライを覗き込み、「うわー出てきたー」と興味深そうに見ていたが、今度は自分の持っているペットボトルをタライの中に沈めた。ペットボトルから泡が出てくると④「Aちゃんのは、ぼこぼこって言うよ」と保育者に知らせた。保育者が見た時にはもう泡は出なくなっていたため、「ぼこぼこって言うてたんだね」と言うと、A児「そうだよ。もう一回やってあげる」と言ってペットボトルの水をジャーっと流し、「先生見ててね」と言ってペットボトルを沈めた。泡がいっぱい出てくるとA児「ほら、ぼこぼこぼこぼこ…」とつぶやいた。保育者「ほんとだ。ぼこぼこっていっぱい出てきたね」と認めると、⑤そばにいたB児「ぷくぷくって聞こえてきた！」と一緒に泡の様子を見て楽しんでいた。



<考察>

- ・水をペットボトルに入れる方法として、①のように小さなカップで水を汲んで少しずつ入れることはA児も今までの経験の中であったのだろう。②のようにB児がペットボトルにタライから直接水を入れようとしたことで、A児、B児はペットボトルから泡が出ることに気付いた。なぜ泡が出てくるかということよりも、この泡が出てくる不思議さを面白いと感じたのだろう。
- ・③で、保育者が泡の出ている様子を「ぷくぷく」と表したことで、B児も同じように「ぷくぷく」と言っていた。保育者の言葉がけが、A児の感じたことを言葉に表すことにつながったのだと思う。
- ・④で、A児は自分の泡はB児とは違うように見え、「ぼこぼこ」と表現した。保育者がそのまま「ぼこぼこ」と繰り返して認めたことで、⑤のようにB児は「ぷくぷく」とまた違った表し方をすることができた。同じ泡を見ていてもA児、B児それぞれに感じ方や表し方が違う。

それぞれの幼児がどう感じているか、感じたことをどのように表しているかを保育者はしっかり受け止め、それぞれ認めていくことで、感じたことを自分なりに表してみようという気持ちが高まることがわかった。又、ペットボトルからの泡のように見逃してしまいそうな事象でも、幼児は関心をもち自分なりの表し方をして、遊びになることがわかった。保育者も幼児の目線になって「面白い」と感じられるような言葉がけや働きかけをしていくことが大切であると思った。

みどころ

ペットボトルの中に水が入っていく様子に興味をもったA児は、3歳児らしい感覚・感性を働かせて水や泡の動き、音を感じ取っています。しかし、自分の思ったことや感じたことをまだ言葉で十分に表現しきれません。そうした子どものつぶやきや興味・関心を保育者が丁寧に受け止め、個々に応じて返していくことで、感じ取った自然の事象や特徴を自分なりに表現することが喜びになっています。また、保育者が仲立ちとなることで、同じ場で遊んでいる子ども同士の、人やものへのかかわりが広がっていく様子がわかります。こうした経験の積み重ねが、「科学する心」の育ちを支える基盤になっています。